

SHOW HEY シネマルーム

★★★

ティアーズ・オブ・ザ・サン

2003 (平成15) 年10月26日観賞

Data

監督：アントワン・フークア

出演：ブルース・ウィリス／モニ
カ・ベルッチ

👁️👁️ みどころ

舞台は内戦下のナイジェリア。反乱軍の残虐さは目をおおうばかり。そんな中で下された命令は「女性医師リーナを救出せよ」だったが、命令が絶対か、それとも人間性が優先するのか、極限状態での選択が迫られた。リーナ医師と難民を連れた脱出劇だけの映画だが、『ティアーズ・オブ・ザ・サン』というタイトルには十分な説得力が・・・

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<舞台は内戦下のナイジェリア>

アフリカの中部、西海岸沿いに位置する国ナイジェリアにクーデターが発生した。大統領一家は殺され、反乱軍は暴虐の限りをつくし、村民たちも虐殺されていた。ナイジェリアに入っていた外国人は、生命の危機にさらされ、次々と国外に脱出した。しかし医療奉仕団としてナイジェリアに赴き、内戦の犠牲者たちの治療に当たっていた医師、リーナ・ケンドリックス（モニカ・ベルッチ）は今なお辺境の村の教会にとどまっていた。

「女性医師リーナ・ケンドリックスを救出せよ。」との命令を受けたのはウォーターズ大尉（ブルース・ウィリス）。7名の精鋭の部下を引き連れた百戦錬磨のウォーターズ大尉にとっては、この任務はありふれたもの。打ち合わせ通りプロフェッショナルとしての技能を発揮すれば、リーナ医師（だけ）の救出はそれほど困難な任務ではなかった。そして予定通り、リーナ医師が治療に当たっている教会に到着。しかしそこに思わぬトラブルが……。リーナ医師は多くの患者を残して自分一人だけで国外へ逃げることを拒否したのだった……。

<テーマは単純な脱出劇だが・・・>

この映画のテーマは、人間の感情を押し殺して命令に忠実に従うことを任務としてきた軍人ウォーターズ大尉と、これと正反対の、人間に対する愛を基準に生きているリーナ医師を対比させながら、極限状況でのウォーターズ大尉率いる特殊チームによるリーナ医師と難民たちの脱出劇だ。このテーマ自体はよくわかる。ストーリーこそ違えこの脱出劇は、『スパイゲーム』（01年）、『エネミーライン』（02年）そして『プライベートライアン』（00年）等、多くのハリウッド映画でも描かれている。しかしこの映画の脱出のストーリーは少し不自然。なぜなら第1に、現実は何十人も難民を連れて、敵地から歩いて国外へ脱出するなどというのはそもそも不可能な話。第2に、難民を脱出させるという行為は内政干渉となって問題となるはず。第3に、その難民の中に、殺された大統領の息子がいることがわかったとしたら、国際紛争の火種になることまちがいなしだ。さらに、第4に、攻撃してくる反乱軍の大部隊を相手に、わずか7名のウォーターズ大尉のスタッフと、武器を手に入れているとはいえ難民たちが整然と退却しながら銃撃戦を展開し、何名かのスタッフは死亡した残ったスタッフも全員負傷するものの、無事国境を越えて、リーナ医師と共にカルメーン国内に逃げきるといのは、あまりにも現実性のないストーリーだ。

しかしこの映画は、そういう現実的な目や冷めた評価を下すことを躊躇させる出来ばえとなっている。

<存在感のある2人の主人公>

ウォーターズ大尉を演ずるのはブルース・ウィリス。彼は一方では、『シックスセンス』（99年）や『アンブレイカブル』（00年）などの「?モノ」路線で活躍しているが、それとは別に『アルマゲドン』（98年）や『ジャスティス』（01年）等の映画で、で男臭さをただよわせた、寡黙で実直、しかし圧倒的なパワーと存在感をもった主役として登場している。

一方のリーナ医師を演ずるモニカ・ベルッチは、『マレーナ』（01年）で大ブレイクし、『アレックス』（02年）では、衝撃的なレイプシーンを体当たりで演じたイタリアの本格的な美人女優。『マトリクス リローデッド』、『マトリクス レボリューションズ』（03年）での謎めいた美女役（チョイ役？）は気に入らないが、本作では彼女がもつ色気をすべて封印して、人間味タップリの女医になりきっている。しかしいくらヨゴレ役に徹しても、美人は美人。ウォーターズ大尉が、自分でもわからないまま、少しずつリーナ医師の意見を採用し、「自己変革」に至ったのは、このリーナ医師の女性としての魅力があったことはたしか。生命をかけた脱出劇の中、表面にはあらわれないものの、2人が当然「ある気持ち」を共有していたことは間違いのない。これはいくつかのシーンを見れば明らかだ。

<2人の演技に注目>

前述のように、この映画は全編を通じて「脱出劇」を描いたものだし、テーマも単純そのものだが、それを陳腐なものにしなかったのは、何よりもこのブルース・ウィリスとモニカ・ベルッチの演技力に負うところが大きだ。

「戦争映画」だし、緊迫したシーンの連続だから当然ながらセリフは少ない。リーナも「騙された！」と泣きわめくシーンはあるが、全編を通じてセリフは少ない。しかしその分、顔の表情や目による訴え、そして身体全体を使ったアクションのウェイトが大きく、役者には結構難しい演技が要求される。しかしブルース・ウィリスとモニカ・ベルッチの2人は見事にこれを演じている。

<タイトルと最後の言葉が訴えるもの>

『TEARS OF THE SUN』とは、太陽ですら涙を流すほどのナイジェリアの惨状を示したタイトルだが、任務に忠実な軍人ウォーターズ大尉が人間味あふれるリーナ医師の影響を受ける中、少しずつ変化していく姿を描きながら、この惨状からの脱出劇をあくまで「前向き」に描いている。

そして最後に流れるのは「The only thing necessary for the triumph of evil is for good men to do nothing. —Edmund Burke」(善なる人々が行動を怠れば、必ず悪が勝利する。—エドマンド・バーク) という言葉。この映画だからこそ、この言葉に説得力があるというものだ。

2003 (平成15) 年10月27日記